

白鳥大橋

一般国道37号室蘭市白鳥新道

白鳥の羽ばたく日

白鳥大橋からついに工事用の足場となっていた“キャットウォーク”が撤去された。ケーブルの懸垂線と補鋼桁のつくる放物線、そしてそれらを結ぶ主塔とハンガーロープの直線。白く美しい橋が室蘭港の入口に姿を現した。

昭和30年、元室蘭開発建設部長猪瀬幸雄博士が地元紙元旦号で「私の初夢」として湾口横断道路を提唱したのが白鳥大橋の端緒とされている。その後、北海道開発局により調査が進められ、昭和56年の事業化、昭和60年の着工を経て、「初夢」から44年目のこの6月13日、白鳥大橋は供用開始することとなった。

東日本最大の吊り橋

白鳥大橋は白鳥新道の主橋梁で、全長1,380m、中央径間720mの東日本最大の吊り橋である。積雪寒冷地初の吊り橋であり、基礎岩盤も深いことから、安全かつ経済的に施工するため、以下のようなさまざまな新技術や新工法を開発し採用してきた。

- 石炭灰を用いた人工島による主塔施工
- 地中連続壁併用逆巻剛体基礎
世界でもっとも深い基礎（海面下73m）
- 日本最大の箱桁吊り橋（完成時）
- 着雪を考慮した耐風設計
- 全ヒンジスイング架設（日本初）
- S字型ワイヤーラッピング（世界初）



室蘭市は3市3町2村で構成される西胆振の中心都市であり、工業都市であると同時に商業、医療など圏域の都市機能が集中している。また、一般国道36号、37号、北海道縦貫自動車道、特定重要港湾室蘭港などを相互に連結する交通の結節点であり、近隣には登別、洞爺湖などの大型観光地が控えている。

しかしながら、室蘭市の都市機能は鍵型となっている半島部に集中しており、半島部の交通の隘路解消が圏域全体の課題となっていた。白鳥新道はその課題解消のため、半島部の突端にある祝津町から室蘭港を跨ぎ、対岸の陣屋町までを結ぶ自動車専用道路として計画された。

白鳥新道の供用により

- ①高速道路との幹線ネットワーク
- ②都市環状内ネットワーク
- ③港湾施設とのネットワーク

が形成され

- ①渋滞解消、時間短縮（快適）
- ②交通事故の減少（安全）
- ③都市施設の有効利用
- ④市立室蘭総合病院（保険医療地域センター）等の広域利用（医療、健康）
- ⑤観光等新産業の育成

の効果が期待されている。

地元では白鳥大橋供用に向けてさまざまな事業、イベントを行政、市民一体となって進めている。室蘭市ではメインケーブルのイルミネーション、主塔ライトアップ、白鳥大橋記念館（みたら）などの建設を行い、市民による開通にむけての募金や、観光ボランティアの勉強会、写真や絵画のコンテストも行われている。

また、開通イベントとして、白鳥大橋供用直前に橋の上を歩く「白鳥大橋WALK」のほか 7月31日から8月9日にかけて行う「千人太鼓」など20以上のイベントを市民手づくりで行う予定である。

白鳥大橋は交通ネットワーク形成のため建設されているが、その大きさと美しさから、単に人やものを運ぶだけでなく、地域のシンボルとして、発展の起爆剤として大きな期待が寄せられている。

